中部大学国際関係学部設立 25 周年記念

この 25 年間日本社会を取り巻く内外の変化

Ulrich Moehwald

表紙の写真

天狗

東京都、杉並区、高円寺北商店街、馬橋稲荷神社の祭りの行列、1987 年

Ulrich Moehwald
ウルリッヒ　メーワルト

中部大学国際関係学部設立 25 周年記念

この 25 年間日本社会を取り巻く内外の変化

講演全記録と日本滞在 22 周年写真集

名古屋 2009 年 11 月

中部大学国際関係学部は 1984 年（昭和 59 年）4 月 1 日にスタートした。同じ年の 10 月 12 日に名古屋国際センターが開催された。私自身は、1987 年（昭和 62 年）9 月 1 日に成田空港に到着した。今日の話は、私が経験した変化を中心として、中部大学国際関係学部設立 25 周年前後の日本社会の変化と日本を取り巻く国際環境の変化を考察する。これは、私のパーソナル視角からの考察だ。今日の話の第 1 部は、1980 年代初頭以降の日本と海外における日本のイメージの変化に関する考察で、第 2 部は、日本で滞在した 22 年間で撮った写真を中心として、私が経験した日本に関する話しだ。私は 1974 年に写真を撮り始めた。私の写真は人間を日常の状況で撮るものだ。その殆どは路上で撮る。

先ずは、少し私と日本との関係について話す方がよいと思う。私は東アジアに関心を持つようになったのは、14 歳頃だ。平和運動に活動して、新左翼に巻き込んで、ベトナム戦争とその国の在り方、中国の文化大革命、毛沢東思想などに強い関心ができた。そして、お母さんが日本の外務省関係の会社で働いた友人を通して、日本に関する情報も沢山手に入った。平和運動に活動した私たちにとって、特に日本国憲法第 9 条に関する情報が興味深いものだった。しかし、私達二人も美術が大好きだったので、中国と日本の美術にも強い関心を持った。私は学校で日本の浮世絵とヨーロッパの印象派との関係について発表したこともある。

1970 年の秋に社会学と民族学を専攻としてマルブルゴ大学に入学した前の入学相談でヨーロッパ以外の言語と文化も勉強する方がよいと言うアドバイスを受けて、もう数年間関心を持った国々の言語と文化を勉強しようと思って、中国学と日本学を副専攻として選んだ。色々なこともあって、結局日本は私の研究の中心になった。

1970 年の秋マルブルゴ大学に入学した時、日本学の新入生は二人だった。それでは、マルブルゴ大学の日本学の学生数が大学院生を含んで 6 人になった。あの頃に西ドイツにおける日本語と日本のことを勉強した人々の数は非常に少なかった。全国の日本研究を専攻した学生の総数は 200 人位だった。当時の日本では殆どの大学生がドイツ語を勉強せざるを得なかったことに比べて、ドイツでは日本に関する関心があまり流行っていなかった。これは西ドイツに限られたことではない。ヨーロッパの他の国々でも、日本に関して研究する人々が非常少なかった。そして、当時のドイツの日本研究の大部分は日本の古典文化と古典文学に集中した。その境界は大体室町時代だった。日本語の勉強も多くの大学で古語と漢文に限られた。同時代の日本にあまり関心がなかった。

マルブルゴ大学の日本学教室、1981 年

当時のヨーロッパにおける日本のイメージは東アジア

の極端にある小さな発展途上国のそれだった。日本は思い浮かんだキーワードは着物、富士ヤマ（富士山）、芸者と広島の原爆だった。日本の工業がそのイメージに入った場合、これは「ヨーロッパのものをコピする劣等な安い物を作る国だ」という事に限られた。日本は、ヨーロッパにとって重要な国として認識されなかった。日本に関する情報の多くも凄く古い資料に基づいた。明治時代の記録はそのままで同時の日本の社会事情を描くために使っていたこともある。ヨーロッパ人は東アジアに眼を向けた時には、これは 20 億人の膨大な市場としての中国だった。

Herbert Ponting はイギリスの写真家だった。彼は 1900 年～1910 年に何回とも日本を訪れた。Ponting は早い頃の報道写真家だって、彼の写真はアメリカの Underwood & Underwood 写真代理店によって販売された。私が一年生として読んだ一つの本において、彼の写真は何枚も使われた。その本は 1969 年に出版された同時の日本の事情をテーマとしたものだった。本で使った写真はすでに 65 年前に撮ったものだとどこでも説明されなかった。私は 1980 年に古本屋さんで Ponting の 1911 年の ”In Lotus Land Japan”という本が手に入った時さえ、この事実を分かった。本で使った写真は、出版社によって写真代理店から購入されたと思うが、執筆者もその古い写真を使うことに対して違和感を抱かなかった。

農村の女性。宇治、写真：Herbert Ponting, 1904 年

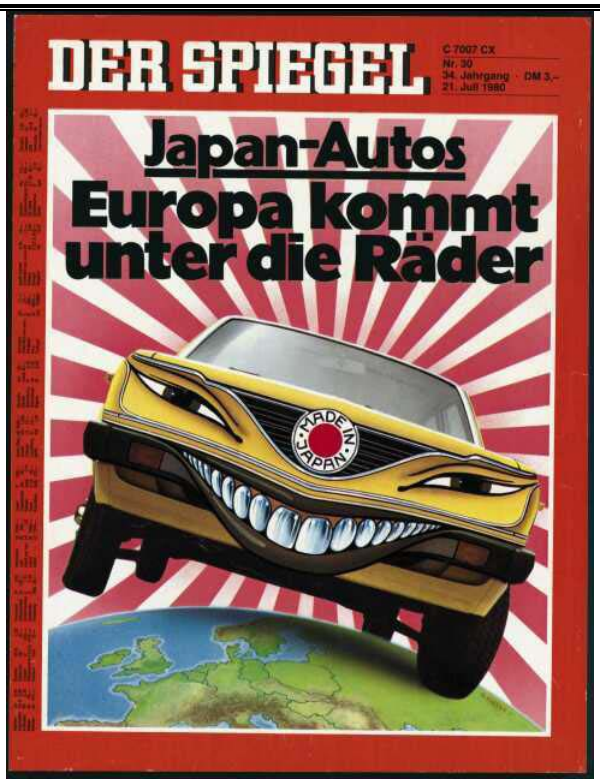
1970 年代を通じて、徐々に日本製のものはヨーロッパの市場に登場した。ドイツでは、既に 1960 年代後半以降日本製のトランジスターラジオと 50cc のオートバイク（ドイツでは、16 歳で運転免許証をとることができるオートバイクだ）が現れたが、1970 年前後から、日本製のステレオとカメラが急速に増えた。これを背景として、日本製の品物のイメージも特に若

者の間に徐々に変わった。「現代の日本に関して勉強しよう」と思って、日本学を選ぶ学生の数も少し増えつつあった。しかし、彼らは入学後に日本学の古典文学の集中によって失望感を抱いて、結局日本学をやめたケースも少なくなかった。

1965 年に新設したボフム大学に既に現代の東アジアの研究に専念する東アジア研究センターも設立されたのに、1970 年以前に西ドイツの日本学の殆どが室町時代以前の研究に集中した。その一つの理由は、第 2 時世界大戦以前に現代の日本を研究対象よしてあった日本学者はナチス党と強く結ばれたことがある。ドイツ語圏でウィーン大学だけが第 2 次世界大戦の後に現代日本に関して研究を行った。しかし、ナチス党との強い関係のゆえに日本学はウィーン大学で戦後に廃止されたので、その研究は民族学の枠組みで行われた。1970 年以前に西ドイツで江戸時代以降に関する研究テーマを選んだ大学院生の多くがマルブルゴ大学に移籍せざるを得なかった。マルブルゴ大学では日本学を担当した Wolf Haenisch 教授自身が歴史学者だった。彼はドイツの有名な中国学者 Erich Haenisch の息子で、1920 年代の半ばに星一によって設立された日独財団がドイツ人に日本での留学奨学金を提供した時に、Haenisch はその最初の留学生として数年間京都大学で東アジア史を勉強した。その背景で、Haenisch は現代日本語の勉強も、現代日本に関する知識も重視した。私が 1970 年に入学した時に、マルブルゴ大学で日本語の勉強は現代語で始まった。3 年生になったから古語の勉強もスタートした。Haenisch は特に現代日本社会に関する研究も積極的に支援した。彼の停年を契機として、彼は 1975 年に日本の社会学を担当する人がマルブルゴ大学に招聘されたことを貫き通した。日本に関する社会科学的な研究は次に日本の民族学を重点として持った Joseph Kreiner が 1977 年にウィーン大学からボン大学への招聘と日本の政治学や経済学を重点として持った Sung-Jo Park のベルリン自由大学への招聘で進んだが、現代日本に関する研究は 1980 年代の末さえ盛んになった。

しかし、1970 年代の末に日本製の自動車がヨーロッパの市場に登場した後、この状況が急速に変わった。1980 年前後、日本製のステレオ、ラジオ、カセットプレヤ、オートバイク、カメラなどはヨーロッパの市場に圧倒的なマーケット・シェアを占めてきた。新技術の導入とオイルショックによって加速されたヨーロッパの産業構造変化によって、1970 年代を通じて西ドイツの多くの会社は、以前に有名な大衆消費向けの商品の生産をやめて、自動車産業は大衆消費財生産の単一の膨大な産業になった。当時の日本の市場はヨーロッパのメーカーにとって閉鎖されながら、日本製の車の登場は、日本のメーカーがこのヨーロッパの産業にとって凄く重要な自動車市場を攻撃するように見られてきた。突然、日本は危険な競争相手として認識されてきた。ドイツには、急速に日本に関する雑誌や新聞の記事、またはポピュラー本があふれてきた。その殆どはジャパンバッシングに偏った。ドイツの場合には、このジャパンバッシングは、日本の経済発展の社会的な費用に重点を置いた。環境汚染の問題、社会福祉制度の遅れ、長い労働時間、住民の生活の質の悪さ（日本人はウサギ小屋、つまり二箱で生活を暮らす）などは繰り返して挙げられてきた。

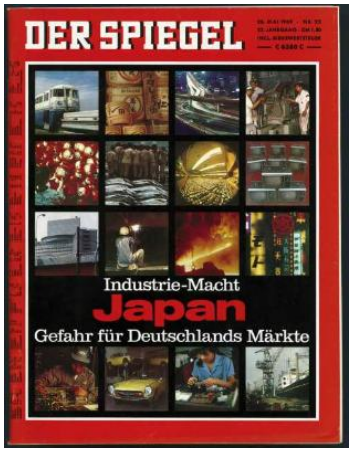
しかし、同時に、日本の経済発展の成功を高く積極的に評価する声も出てきた。日本の産業から何か習うことはできないのかという立場は特に産業界、政治家、学者などによって提供されてきた。この様な人は、ドイツの日本研究が当時の日本を正しく把握することに失敗した批判も主張して、ドイツは現代の日本を理解できる専門化が必要であると要求した。それを背景として 1980 年代の初頭から日本学の入学者が急速に増え、同年代の末に日本研究を専攻した学生の総数は何千人に及んできた。日本に強い関心を持つ経済学者、政治学者、社会学者、文化人類学者などもその時期に増えつつあった。ドイツのみならず、その他のヨーロッパの国々でも、古典文化から現代の社会と文化への日本研究の大きなパラダイム転換が起こった。



Der Spiegel"1980 年の第 30 号(7 月 21 日)
日本の自動車 — ヨーロッパは車輪の下敷きになる

Der Spiegel"1982 年の第 1 号(1 月 4 日)
日本から習うのか？いいえ！

Der Spiegel は 1947 年に設立された、ドイツの最大の週刊誌だ。毎週特別なテーマがタイトル・ストリーとして選んでいる。1947 年と 1989 年の間、日本は 7 回タイトル・ストリーのテーマになった(同じ時期に中国は 31 回テーマになった)。日本は吉田茂に関するストリーで 1951 年 9 月 12 日に初めて Der Spiegel のタイトルに現れた。1953 年 7 月 29 日に明人皇太子に関するストリーが続いた後、1969 年 5 月 26 日まで、日本はタイトルに現れなかった。その日に「工業大国日本 — ドイツの産業にとっての危険」がテーマになったが、1971 年 7 月 12 日に、「日本の成功が終わった」というようなテーマがタイトルだった後、以上の 1980 年 7 月 21 日まで日本はタイトルにならなかった。以上の 2 つのタイトル・ストリー以外、日本は 1980 年代でもう一回、1988 年 9 月 5 日に、日本におけるレジャー産業でテーマになった。危険な競争相手としては、日本は 1992 年 3 月 9 日にもう一回 Der Spiegel のタイトルに現れた。現在まで最後のタイトルは、1998 年 6 月 22 日の「日本 — 手本として失敗した」というストリーだった。



1969 年 22 号
工業大国日本 — ドイツの市場にとっての危険

1971 年 29 号
日本 — 巨人が小さくなる

1992 年 11 号
チッピプの戦争 — 日本は西洋を踏みにじる

私は、1987 年 9 月に日本に着いた時は、バブル経済の最中だった。実際には、バブル経済が既に 1981 年の日本の金融市場の開放でスタートした。バブルの時代の重要なキーワードは「国際化」だった。「国際化」と言う概念は本来経済学でできた。企業が国際市場に巻き込んでいる事柄に目指した概念だ。確かに、バブルの背景には、日本企業が昭和 50 年代にますます国際市場に巻き込んできたことも働いた。特に金融市場の開放の後に、欧米の重要な市場に日本の金融会社、東京と大阪に外資の金融会社が急激に増えた。れども、バブル時代の日本では、国際化はむしろ「複数の国々が互いの経済的、社会的と文化的な交流を進める」意味で使った。「日本が国際社会に開くべきだ」と言うような規範的な文脈も存在した。どの市・町・村でも国際化を振興しようとする活動が多発した。

熊本県のある中学校の生徒は修学旅行中で鎌倉大仏の前に外国人の観光者と対話する。鎌倉、1988 年 4 月

私は 1987 年に国際交流基金の支援で来日した。基金の紹介で何回とも国際化に関するシンポジウムに参加した。1988 年 2 月に、名古屋国際センターで東海銀行国際財団によって開催されたシンポジウムに参加したこともある。しかし、国際化はその様の大きな組織に限られていなかった。一般住民も、そのような活動に積極的に巻き込んでいた。例えば、地方の中学生には、奈良、京都、鎌倉、日光などの修学旅行中で、外国人の観光者に接触し、インタビューする課題が与えられた。私は地方の友たちを訪れた時に、公民館、学校などで「海外の事情」について話すことがよく頼まれた。

時々かなりうるさくなった。都会の道を歩いて、日本人に接触されて、”may I try my English on you”ということも殆ど毎日あった。けれども、「海外を理解することが必要、外国語ができることが必要ということは、あの頃に日本人の一般的なムードだったということができる。このようなムードは 1984 年以降の中部大学国際関係学部の成功にも影響を与えたと思う。中部大学国際関係学部の特徴は、複数の言語の能力を育成することに基づいて、世界の

複数の地域の文化、社会、経済、政治などに関する知識を育成することだった。このような目的は当時の「国際化」ムードによく相当したと思う。

明治神宮を訪れる外国人の観光者、1987 年 9 月

国際化の時代に、海外の都市との姉妹関係を結ぶ日本の都市も急速に増えた。米沢市の 1988 年度の上杉神社祭りでは、アメリカ・ワシントン州の姉妹都市 Mose Lake のビューティ・クイーンが大人気だった。1988 年 5 月。

地方の公民館における「海外事情」に関する勉強会とその後の宴会。東京都立川市、1988 年 1 月

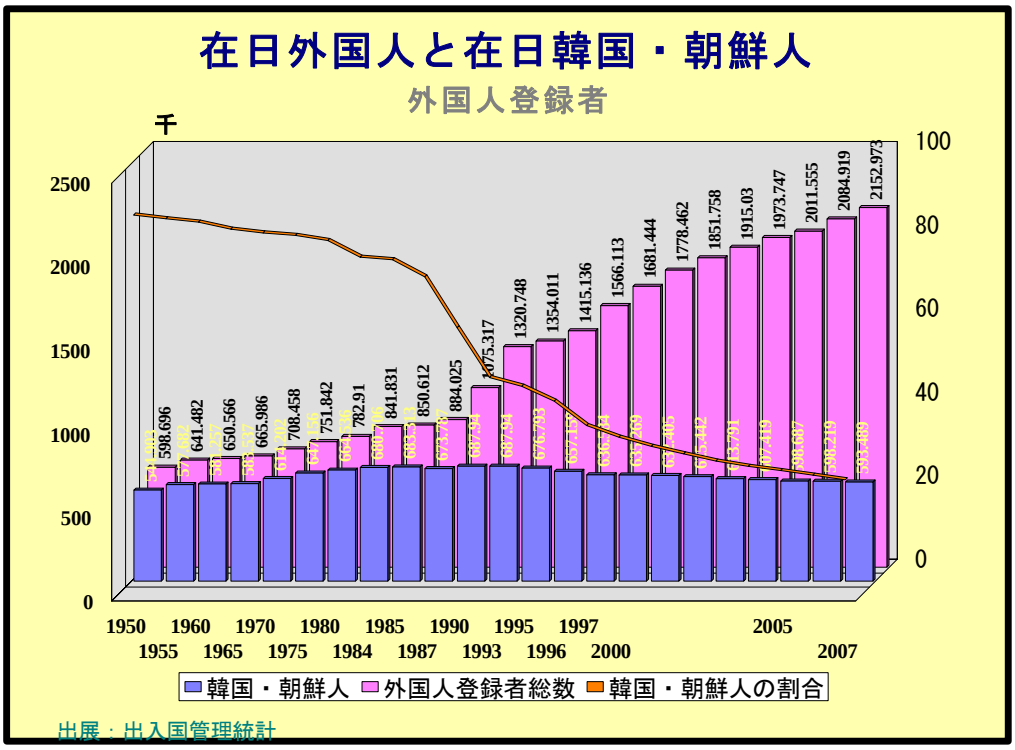
バブルの時代は単に皆が国際化に努力した時期でもなかった。日本の政府の立場も相反するようだった。一方には輸出に依存した大企業を重視した通産省が積極的に国際化を進行しようとした。他方には、外国人の流入に対して違和感を抱き、国内市場を国際的な競争に対して守ろうとした鎖国派が政府と政治家の一部に強かった。バブル時代はジャパンバッシングといわゆる「文化摩擦」の時代でもあった。特にアメリカ側にとってアメリカの牛肉と建設ゼネコンの市場アクセスが重要な争点だった。日本側の反応は時々本当に変なようになった。1987 年には、外務省によって「日本人の腸は、外国人のそれより長いので、牛肉を余り食べる事ができない」と主張した「研究成果」を外国の報道者に渡されて、これに基づいて、牛肉の輸入の禁止を弁明した。1988 春に、外務省は外国の報道者のために、海外でも有名な東大のある文化人類者の彼女の日本の縦社会論の説明会を開催した。彼女の結論は、外国のゼネコンが日本の建設業における会社の同族的な関係に対して余所者であるので、アメリカのゼネコンが関西空港の建設事業から外れることが必要だということ

だった。

一般住民の多くの国際化意識も非常に表面的だったと言わざるを得ない。東京・大阪・神戸で見られる国際化は取り敢えず英会話ブームと外国レストランのブームの形で現れた。多くの人々にとって国際化は、英会話、海外旅行、外食と海外のブランド品を意味した。金持ちの間に、外国製の車が人気になった。ばかばかしいこと思ったが、左ハンドルでなければならなかった。イギリス製の車もヨーロッパ大陸用のモデルだけとして輸入された。けれども、一つのことが事実であると思う。これは、バブル経済と国際化は日本社会の急速な変化を起こしたことだ。

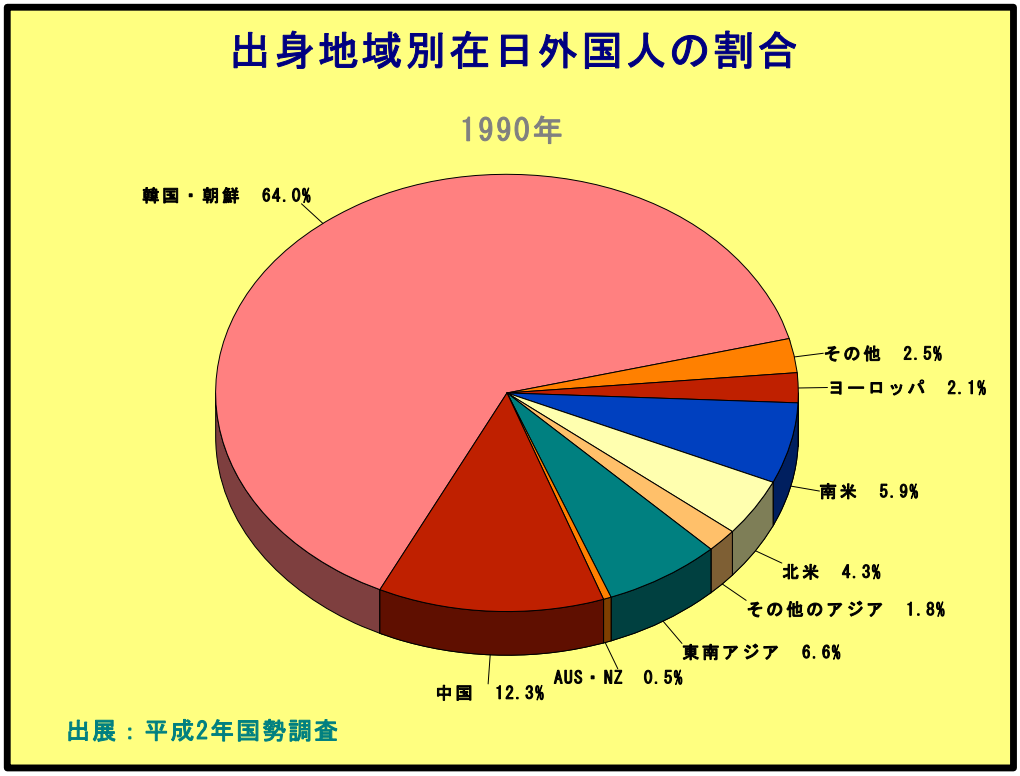
日本は国際社会の一員だ！幼稚園の運動会に全世界の国旗が表示されている。愛知県豊明市、1987 年 9 月。

バブル経済、日本の市場の開放と国際化によって、在日外国人は急速に増えたと広く思われている。しかし、実際には在日外国人の急速な増加がバブル崩壊以降に起こった。1990 年に、在日外国人の 64%は在日朝鮮人・韓国人だった。この数に、特別永住者の中国人を加算すると、戦前に朝鮮半島、台湾と満州国から本土に来た人とその子孫は在日外国人の 70%位占めた。

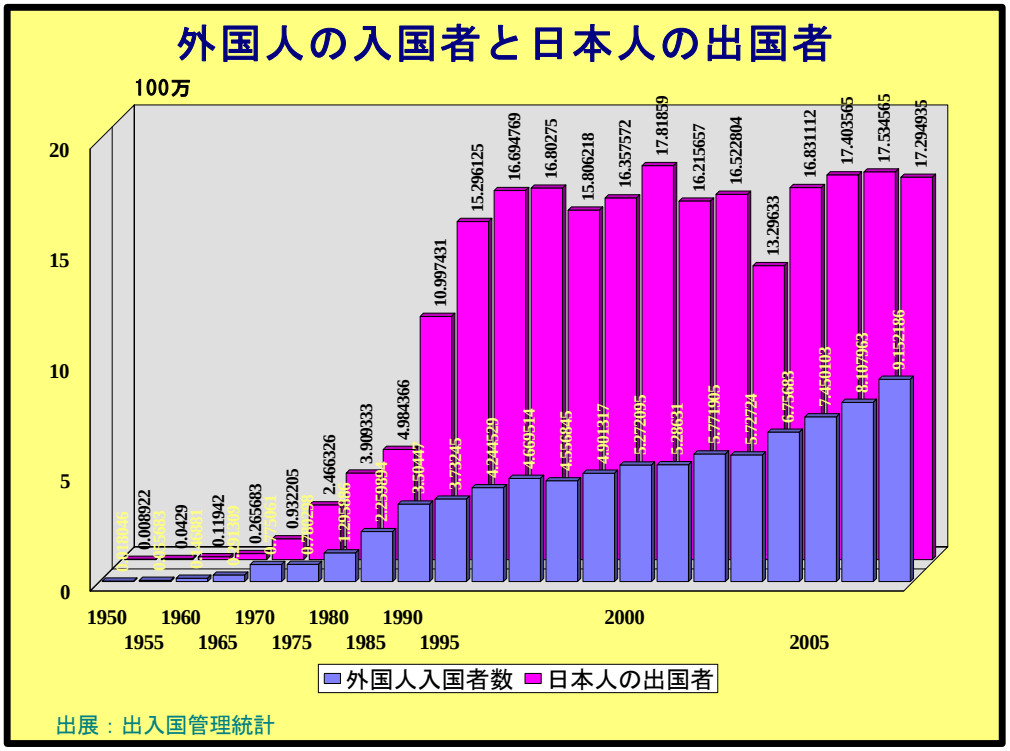


特に、「外人」のイメージを成した北米人、ヨーロッパ人、オーストラリア人とニューシーランド人の割合はあわせて在日外個人の 6.9%しか占めていなかった。それに加えて、その殆どが東京・大阪・神戸に集中した。1990 年代初頭まで、白人

として地方を訪れた時に、珍しい者として見られた。1990 年代前半に山形県では、一ヶ月以上に滞在した外国人は皆地方の新聞とテレビに出た。



ビシネスのために日本を訪れる外国人は既に 1980 年以降増えたが、バブル時代は円高の時代でもあったので、観光者が余り増えなかった。したがって、2005 年まで、入国者（これは日本に定住する再入国者も含む）の数が緩やかしか増えなかった。他方には、外国を訪れる日本人がすでに 1975 年以降急速に増えて、1995 年に 1000 万人を越え、1996 年以降 1500 万人前後のレベルである。



もう一度外国における日本のイメージに戻ろう。1980 年の後には、日本のイメージが突然

発展途上国のそれから先端に国のそれに変わった。オイルショックの後に起こった産業の構造変化と工業の電子化の対応で悩んだ欧米の諸国において日本の奇跡から何か習うことはできないのかという立場は特に産業界、政治家、学者などによって提供されてきた。この様な人は、ドイツの日本研究が当時の日本を正しく把握することに失敗した批判も主張して、ドイツは、現代の日本を理解できる専門家が必要であると要求した。このパラダイム転換によって、現代日本の研究に凄い拍車がかかってきた。東アジアに向けた目も変わった。中国の変わりに、日本を中心として、東アジアの"little tigers"、つまり、1980 年以降産業化が凄いスピードで進んできた新興工業国の韓国、台湾、香港やシンガポールが視野に入ってきた。「21 世紀は東アジアの世紀だ」と考えるようになった。

「21 世紀は東アジアの世紀！」は 1986 年に西ベルリンの自由大学東アジア研究所とベルリン社会科学センターによって共催された三日間の国際会議の表題だった。経済学者と経済政策専門の政治学者を中心として日本、台湾、韓国とシンガポールの経済発展の成功の要因を分析する会議だった。経済システムの改革がスターしたばかりの中国は未だ余り視野に入らなかった。私に興味深いことは、この会議に参加した専門家はそれらの国々の経済発展のデータに基づいて余り議論しなかったことだ。彼らが東アジアの諸国の成功の理由を主として文化的な要素に求めて、その国々の文化の共通点として儒教を確認して、これはその成功の主な要因だと結論した。私自身はカルチャー・スタディズの専門家のない学者のこのような解釈と結論に対して強い疑問を抱いた。勿論、東アジアには、儒教は伝統文化の一つの共通の要素であるが、それぞれの国々の歴史的な発展において儒教の地位がかなり違った。韓国において王陽明学の新儒教が確かに社会の全体に根強く定着しているが、日本では、朱子学の新儒教の影響は江戸時代の武士と町人の上層に限られた、同時に国学と蘭学と競争する思想だった。更に又、近代化を振興した志士は、「脱亜」のスローガンに従って儒教を寧ろ捨てた。台湾では中国の南部と同じ伝統で、新儒教の影響がむしろ弱く、そしてシンガポールは多民族・他文化の社会で、漢民族の支配エリートにおいては、儒教がどの程度の影響を及ぼしているかも確認し難い[1]。

けれども、ここでより重要なポイントは、この会議は私にとって本当の既視体験を起こしたことだ。私は 1970 年代に主に発展途上国の社会学と経済的な発展の研究に専念した。当時の議論において日本の発展は主としてヨーロッパの諸国（特にイギリス）の発展をベースとした理論的なモデルにフィットしなかったので、何時も取り扱い難いケースだった。理論的なモデルを修正するよりも、モデルと日本の実態との間における相違を無くするために、日本の「文化的特徴」を取り上げて、補助的説明を作成した。しかし、このやり方は、モデルを事実に対応させることではなく、事実をモデルに対応させる作業であるし、どのケースも「文化的特徴」を持っているので、一つのケースだけにぴったり当てるモデルは普遍的な妥当性を要求し得ないというポイントは当時の争点になった。「日本の奇跡」の分析も同じ方向に進んだ。日本、または、東アジアの「文化的特徴」が以上の国々の事実を欧米の諸社会に

[1] 何らか共通のポイントがあれば、これは、明治期の日本、シンガポール、台湾と韓国の全ては産業社会への移行の初期に、近代化を振興したエリートの権威主義的な政治体制、もしくは独裁制の下に置かれたことだ。

基づく理論的なモデルにフィットさせるための補助的説明として使われた。

したがって、当時の日本について感心を持った社会科学者の間に、「日本の秘密」を一つの文化的な原理で簡単に説明した説が非常に人気だった。中根千絵の『縦社会の人間関係』、土井武夫の『甘えの構造』などのような日本人論は、1970 年代末以降欧米の研究者に流行って、日本バッシングのためにも、日本美化のためにも使われてきた。

言うまでもないが、日本が社会的なダムピングで成功したイメージも、日本の奇跡のイメージも、両方も間違いだった[2]。前者は日本の経済的な発達の社会的な費用だけに眼を向けて、日本の経済の根本的な強さと日本における社会変化を無視した。後者は、トヨタ・システムと通産省の計画力だけに眼を向けて、当時の日本の社会の隠れた弱点を無視した。又、両方とも欧米の経済力を過小に評価した[3]。

私は 1987 年に日本に来た時に、農村研究と家族研究に関するプロジェクトを持った。最初から幅広く研究会と学会に参加した。全国の各地も旅行した。同じ時期に国際交流基金の奨学金で日本とヨーロッパにおける衰微産業に関する比較研究を行った、でも日本語が不十分しかできなかったスェーデン人を助けて、彼と一緒に通産省と労働省の専門家のインタビューに出掛けた。農村と都市の一般住民にも積極に接近して、彼らの話も受け入れた。日本人は普通外国人が聞きたいと思ったことを話した。というのは、日本人の話が基本的に日本人論のステレオタイプを繰り返して、外国人もそのステロタイプを聞くことを期待して、それでは自分が持ったイメージと先入観を確認した。しかし、日本語ができたら、一度建前の話を潰した後、本音のとても面白い話を聴くことが多かった。普通の外国人研究員よりも日本人の日常生活を多面的で体験することができた。私が観察した日常生活の状況に基づいて繰り返して欧米の研究者が描いた日本のイメージについて驚いた。

日本人の生活の質は決してドイツのポピュラー本で描いた程に悪くなかった。確かに、特に古い建設の住宅は狭かったが、かなりのバライエティーも存在したし、新建設はより広い住宅を提供しつつあった。物価が高かったが、ドイツの雑誌で描いた 1 メロン 2 万円のような物価は南麻布のNationalスーパー、青山通りの紀ノ国屋インタナショナルなどのような高級の店に限られた。それに加えて、外国人が感じた物価の高さは大体円高の効果だった。東京の空気の質は、当時の西ベルリンのそれに比べて、明らかに良かった。他方に、日本は「先端技術の天国」でもなかった。初めて日本の事務室を見たときに、ショックを受けた。机には山ほどに書類が集まって、全ての事務的な仕事は手書きだった。OLは毎日何回ともこの書類の山を手続きの締め切りに応じて再整理した。当時のドイツの事務室で日本製の

---

[2] 当時のドイツにおける日本に対する批判は大体ドイツ労働組合総同盟に近い執筆者によってあげられた。この批判はある程度にドイツの企業家による日本における労使関係の賛美に対する反応だった。勿論、その賛美は終身雇用と年功序列という日本型雇用に目指さなかった。これは当時のドイツに既に存在した。旧西ドイツの労働法において期間の定めのない雇用は標準として設定されて、解雇や任期制雇用に厳しい制限や条件がついた。企業家はむしろドイツの社会学者 Christoph Deutschmann が"Rundumnutzung der Arbeitskraft"と呼んだ実践、つまり長い労働時間、サービス残業、雇用主の気分で決める雇用者の残業と派遣などに目を向けた。

[3] ヨーロッパにおける悩みは、大体産業の構造変化と先端技術化でもたらされた失業から発生した。企業は景気に戻った後にも、失業率が高い水準を占め続いたことが経済的な弱さの証明として見なされた。

PC がいっぱい使われた状態に比べて、日本ではPCは殆ど見られなかった、ワープローも少なかったし、OLだけがワープローを利用できた。オフィス・オートメーションは決して進んでいなかった。日本では、労働の生産性がヨーロッパより低い印象は、その他の観察でも支えた。特にスーパーのレジとガソリンスタンドで働いた人々の数について驚いた。サービスがとてもよかったが、当時のドイツでは、殆どのガソリンスタンドがセルフ・サービスだったし、スーパーでは客さんが買った物を鞄に入れる人が全然考えられないことだった。労働力が安い印象だった。一番驚いたのは、働く老人の数だった。ガードマン、駅で掃除をやる人々など、みんな老人だった。調べた後に分かった。日本における年金制度が 1959 年に導入され、1985 年まで公平な制度ではなかったので、バブルの時代に年金を受領していない、または不十分しか受領していなかった老人が多かったので、ヨーロッパに比べて、生活費を自分の仕事から得る老人の割合は非常に高かった[4]。そして、大手企業と中小企業の間における相違、正規社員と非正規社員の間における相違も分かってきた。

日本に関する色々なイメージは神話、幻想だったことを早く分った。例えば、日本の勤労者が凄く搾取されているから、日本の企業が成功したことはその一つだった。当時の日本人の大部分は一定の生活水準を守ることができた。失業率も、貧困率もヨーロッパのそれを下回ったし、高校・大学への進学率はより高かった。しかし、「1億4千万人総中流」も神話だった。社会経済的な階層間[5]の格差とそのバブル時代における拡大が明白に見られた。ジェームズ・アベグレンの 1959 年著書『The Japanese Factory』以降日本型雇用制度として考えられた終身雇用・年功序列制度が官僚と大手企業の正規社員に限られた制度だったことも分ってきた[6]。チャルマーズ・ジョンソンの 1982 年著書『通産省と日本の奇跡』の後、欧米の殆どの研究社は戦後日本の高度経済成長が単独に通産省主導による産業政策を通して達成されたと信じて、日本の官僚の計画力が世界一だと思ったが、私はこの解釈に対して強い疑問を抱いた。実際には、経済のマクロ要因が日本にとって有利だったし、日本の官僚の政策上の間違いが少なかったというイギリスの若い経済学者の意見に賛成した[7]。通産省と労働省で、衰微産業に関する対策についてのインタビューに参加した後、私の疑問がさらに強くなった。私の経験では、日本の官僚は殆どフレキシブルではなく、見慣れな

---

[4] 総務庁長官官房老人対策室の 1981 年の第 1 回、1986 年の第 2 回、1991 年の第 3 回国際比較調査『老人の生活と意識』を見てみると、日本の老人（60 歳以上の男女）の半分だけの主な収入源は年金だった（その割合はその 10 年間に 39%から 56%に増えた）、3 分の 1 の主な収入源は就業による収入だった。同じ時期のヨーロッパでは、老人の 80%以上の主な収入源は年金だった。日本の老人の半分以上は就業したことに比べて、ヨーロッパの場合には 10%位しか就業しなかった。そして、1991 年でも 70 歳まで働き続けた男性の割合は日本で 62%、ドイツでは 11%で、ドイツでは 70 歳以上で働き続いた男性の割合は 0 だったことに比べて、日本の場合には、その割合が 80 歳まで 30%を超えた。

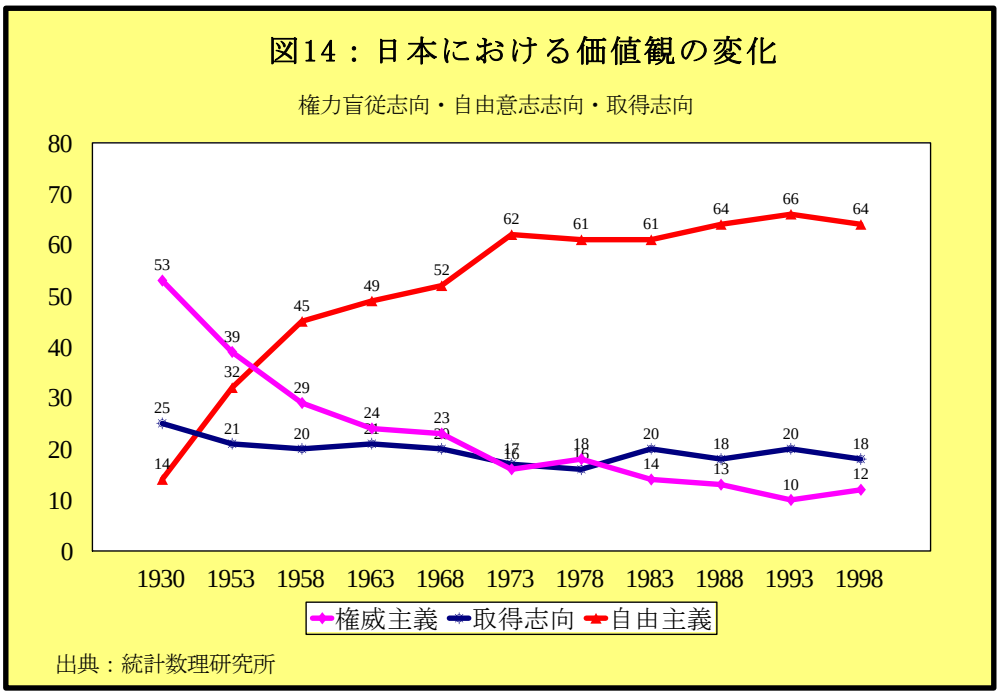
[5] 勤めた企業のサイズ、仕事上の地位と職種によって定義される。

[6] 又は、「終身雇用」は、決して「終身」でもない。労働基準法第 14 条の「期間の定めのない雇用」として、最長、企業が定めた定年までの雇用に過ぎない。この場合には、昔に定年が 28 歳で定められた OL も「終身雇用」だった。

[7] 間違いが少なかったが、間違いも存在した。例えば、日本のコンピュータ市場をアメリカの会社に対して防衛するために、通産省が他の言語に対応しにくい JIS コードテーブルと NEC のオペレーティング・システムを導入した。両方は 1980 年代末以降、DOS-V の導入まで日本のコンピュータと海外のコンピュータの間における国際情報交換を凄く妨害した。DOS-V でも英語以外の外国語との対応が難しい。

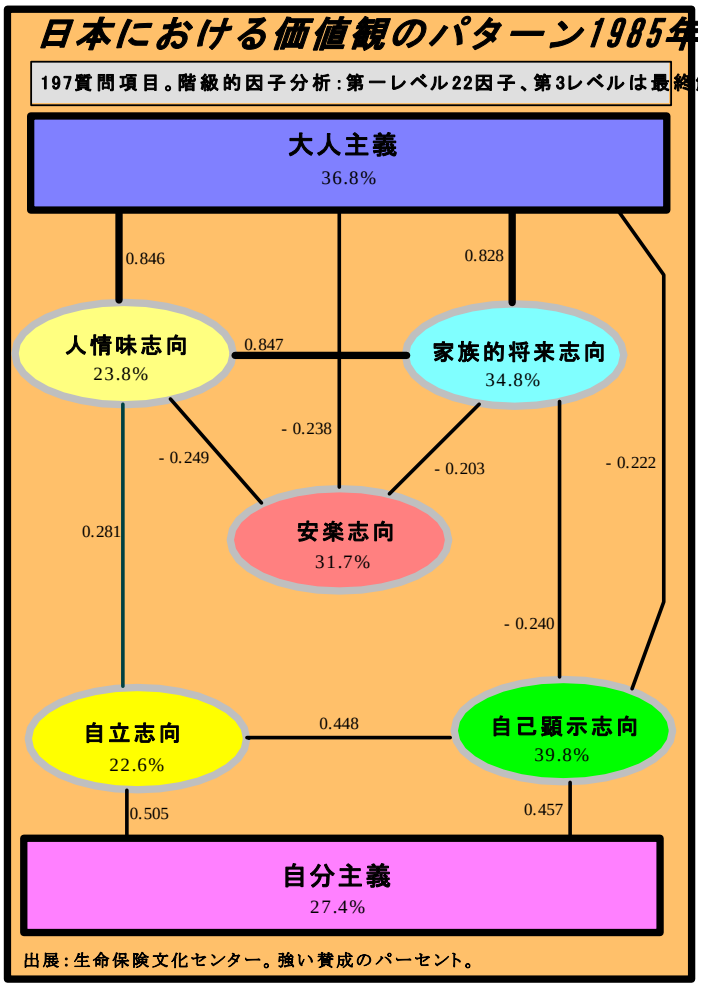
い状況の対応が必要になった時に困った印象が強かった。従って、官僚の計画力に対しても疑問を抱いた。勿論、日本の経済的な発展は「奇跡」だと思う場合に、この奇跡を起こした「かみさま」もしくは「せいじん」を見付けることも必要になる。

バブルの崩壊などについて話を続ける前に、日本とヨーロッパにおける価値観の変化について話した方がよいと思う。私は、1989 年～1993 年に在東京ドイツ日本研究所の専任研究員として働き、同研究所の日本人の価値観の変化に関する研究プロジェクトに参加して、全国のアンケート調査を担当した。その研究プロジェクトで、1980 年代は、日本でも、ヨーロッパでも価値観の変化のとても重要な時期だったと分かってきた。日本でも、ドイツでも、価値観の変化は基本的に二つの時期に分けることができる。両国でも、第一時期は基本的に権威主義的・保守的な価値観から自由主義・進歩的な価値観への変化だった。この様な変化が、日本では既に 1950 年代の初頭に始まったことに比べて、ドイツでは 1960 年代の初頭からより遅く始まった。日本だけを考察すると、以上の二つの価値観の次元の間における分裂は時々激しかったのに、両方は根本的に日本社会の復活と再構築に対する責任感を含んだ。特に「自由主義」は強い理想主義の要素も含んだ。両国でもこの様な変化が 1970 年代の前半まで続けた。日本における変化は、特に「日本人の国民性調査」の結果で追跡することができる。



1978 年の調査のデータを検討した時、統計数理研究所の研究者が先ず驚いた。自由主義の次元と結びついた質問項目の多くの場合に、自由主義の回答肢を選んだ人の割合は少し減り、権威主義の次元と結びついた回答肢を選んだ人の割合が増えたが、全ての項目はそうではなかった。20 年間続いた価値観の変化が「終わった」か、若しくは「U-ターンが起こった」かというような議論があった。しかし、1983 年の調査結果で、従来の価値観次元の分裂が解体することが明らかになったが、何が起こるかというのは「日本人の国民性調査」に含んだ質問項目で明白に把握する事ができなかった。同じようなことが当時のドイツ

のアンケート調査のデータでも現れた。このポイントで生命保険文化センターの 1985 年の「日本人の生活価値観調査」に目を向けた方がよい。10 年前の調査では、権威主義と自由主義の価値観の次元分裂がまだ明らかに現れたことに比べて、価値観の次元がかなり多様化して、新しい分裂が現れた。特に若者の間に、同時に強い快楽主義（責任と義務を否定して、のんきに生活を暮らしたい）と獲得的な物質主義（欲しい物は、ローンやクレジットを使っても、すぐ手に入れたい）を混ざった志向が非常に強かった[8]。1991 年の調査の結果において、このような発達がさらに進んでいた。今回には、特に 39 歳までの年齢グループで強く抱いた志向だった[9]。



責任と努力を否定しながら、インスタント・グラティフィケーションに向けている生活志向はバブル時代の日本人の精神を良く描いていると思う。少なくとも当時の東京の印象で、皆はすぐリチになって、ブランド品を沢山手に入るために、株の市場でギャンブルした。若い奥さんたちが家庭の貯蓄も使って、株を買うためにローンを取ったケースも当時に報道された。バ

[8] 平均の 40%に比べて、16 歳～19 歳の回答者の 74%、20 歳～34 歳の回答者の 56%はこの志向を強く抱いた。これは、田中康夫の 1980 年の小説『なんとなく、クリスタル』に現れる生活志向によく相当する志向である。

[9] 平均の 29%に比べて、16 歳～19 歳の回答者の 50%、20 歳～24歳の回答者の 42%、25 歳～39 歳の回答者の 34%はこの志向を強く抱いた

ブルの崩壊の後に困った家庭も少なくなかった。

しかし、以上の価値観変化によって日本社会に与えた影響は特に若者に強くて、教育制度の急速な変化にも現れると思う。1980 年代で、日本の教育制度が日本の奇跡を説明できる一つの要素として海外でも注目を引いた。勿論、日本の教育制度の解釈も二分化された。一方には、主として日本の子供の低い無識字率と国際コンテストにおける数学や化学の高いスコアだけに眼を向けて、日本の教育制度を美化した。特に当時に自国の教育制度の悪いパフォーマンスで悩んだアメリカの学者の間にその傾向が強かった。彼らの多くは、Merry White の 1987 年の著書 ”The Japanese Educational Challenge: A Commitment to Children” のように日本の教育制度、特に初等教育を自国のためのモデルとして提案した。他方には、Jean-François Sabouret の 1985 年の著書 “L’empire du concours: Lycéens et enseignants au Japon”、若しくは Ken Schoolland の 1990 年の著書 “Shogun’s Ghost: The Dark Side of Japanese Education” のように受験地獄と管理教育の暗い面だけに目を向けて、日本の教育制度を厳しく批判した。勿論、両面も当時の日本における教育制度の重要な側面を成したし、海外における議論の日本像は大体に自国における社会問題の鏡の機能を果たした。だから、どの側面を強調したかのは、主として執筆者が自国の批判の論理に従った。日本における社会変動の趨勢は更に違った。

私が日本に来た時に、管理教育が未だ根強く固定するらしかった。しかし、管理教育の崩壊の前触れも観察することができた。1987 年の秋に岡林信康のコンサートで知り合いになった友達は、夜間高校の数学・物理学の教師だった。彼の学校では、生徒の大部分は普通の高校を退学して就職したが、高校卒業なしに就職上に非常に不利な状況に置かれたので、夜間学校に入学した。しかし、生徒の意欲や規律の欠如が大きな問題だった。生徒が 45 分間に注意することができなかったし、授業中の生徒の私語と出入りが煩かった。彼の学校で見た状況は、当時の欧米で教育制度の大問題として広く議論された”collapse of classroom discipline”のよい例だった。勿論、彼の高校の生徒は特別だったが、そのよう退学者の存在自体が、一般高校に隠れた問題に指した。もう一つの前触れは、毎年『世界』と言う雑誌と大学生協によって行われた読書調査の結果だった。1987 年以降、本を読む若者の割合は毎年に減った、1991 年には結局少数派になった。管理教育は一般住民の同意も失いつつあった。1987 年には、主として海外の留学の経験を持った人が管理教育の文句を言ったが、1990 年に神戸高塚高校校門圧死事件などのような酷い事件が繰り返して報道され、「児童の権利に関する条約」がマスメディアで広く議論されてきた後、一般住民の間にも管理教育に対する批判が活発的になった。結局、勉強意欲の低下、クラスにおける規律の崩壊、いじめ、不登校などの様々な問題の対策として「ゆとり教育」が提案されてきた。

バブルの崩壊によって、日本の社会と経済に内在した弱点が明白になった。先ず政府による金融機関に対する監督が不十分だったことが明らかになった。一番早く困ったのは証券会社だった。山一證券のような違法行為は証券業界では少なかったこともあるが、バブル時代で毎年に利益が増えた証券会社の収入が株価低迷によって下落して、会社の状況が

厳しくなった[10]。バブル時代における不動産・株式投機はある程度に皆が負ける膨大なポンジ・スキームに似た。投機によって暴騰されつつあった地価と株価の不動産や株は投機のためのローンの保障として使ったが、期待した利益は再投資の前に実現されていなかった。だから、バブルの崩壊後の地価や株価の急激な下落によって、投機家の収入が赤字になったのみならず、ローンの保障の価格も下落した。結果としては、銀行は膨大な不良債権を貯まった。その対策としては、銀行が早く不良債権の清算と減価償却を行った方がよかったが、これは銀行の利益の下落の他に多くの債務者の破産ももたらすはずだった。このときに問題を悪化したのは不良債権の清算を妨害した政府や官僚の干渉だった。バブルで膨大なローンを貯まって破産の危険があった債務者の一人は住宅金融専門会社だった。しかし、住専の破産はその親機関の農林系金融機関（農林中央金庫、各県の信用農業組合連合会、全国共済農業協同組合連合会）の一部の破産の危険もあった。農林系金融機関の特徴は、農林中央金庫は、1986 年に特別民間法人になって、銀行免許を受けたのに、相変わらず金融庁の管轄ではなく、農林水産省の管轄下に置かれ続いたことだ。もう一つの特徴は、JAバンク系列の破産は結局、自民党の重要な投票基盤であった全共連の組合員の農民に悪影響を与えるはずだったことだ。したがって、自民党は不良債権問題の解決を 1995 年まで延期させた。その結果としては、無払い利息などのゆえに不良債権の総価格と日本の銀行の赤字は毎年増えて、数年前に世界市場で恐ろしい存在だった日本の銀行の国際的な貸し金信用が落ちてしまった。でも、この様な状況は日本の経済にも悪影響を与えた。不良債権を一敗持った銀行は新しいローンを厳しく制限した。結果としては、特に中小企業の厳しい融資難が起こった。デフレーションと融資難、又は 1995 年の阪神・淡路大震災や 1997 年のアジア通貨危機の経済への悪影響を背景として、日本は平成不景気にすべり込んだ。

バブルの崩壊後、日本の官僚の以前に優れたイメージが国内外で徐々に衰微して行ったが、1995 年の後には、これは最底辺まで落ちた。1 月には、阪神・淡路大震災に対する反応が非常に悪く、3 月には地下鉄サリン事件が起こり、警察のオウム真理教に対する処置の遅れとその前の年の松本サリン事件の取り扱いのミスなどが明らかになった。それに加えて、山一證券の破産と銀行の不良債権の国による購入が住民の立腹を起こした。この様な状況で宮本政於の 1993 年の著書『お役所の掟』は国内外でベストセラーになった。

平成不景気が急速に進んで、1996 年に完全失業率が 3.4%を越えて、この統計がスタートした 1953 年以来の最高水準になったが、特に学校から就職に移行する若者の場合に、15 歳～19 歳の 9%と 20 歳～24 歳の 6.1%は目立った[11]。日本は 1980 年代の欧米の状況

---

[10] 夫が証券会社で働いたドイツ日本研究所の同僚の話で、証券会社の若いサラリーマンの多くは、この発達でどの程度に悩んできたことも分かった。自分自身を日本のサラリーマンのエリートとして認識した証券会社の若いサラリーマンは毎年に所得とボーナスの増加を経験して、これが永遠に続くと信じて、凄いローンを貯まって、高級マンション、高級外車、高級ブランド品のライフスタイルに乗った。しかし、バブル崩壊の後、先ず以前に 8 ヶ月分のボーナスが厳しくカットされて、結局、年収が 50%までカットされてきたことによって、貯まったローンの払い戻し、利子の払いさえで困った人が少なかった。

[11] 失業率は 2002 年の 5.4%まで毎年上昇した。その年に、15 歳～19 歳の若者の失業率が 12.8%、20 歳～24 差の若者のそれが 9.3%を達した。しかし、失業率は現在まで 1996 年の水準を上回って、特に若者の

に落ちてしまった。同じ 1996 年に、マツダ株式会社はフォード・モーターの傘下に入り、1990 年代の後半に、その他の日本の車メーカーも経済的に困って、海外の大手車メーカーとの連帯関係を探してきた[12]。10 年前に、このようなことが将来に起こり得ると言ったら、欧米で、誰もがこれを信じなかった。しかし、この発達で、海外における"Super-State Japan"のイメージも急速に消えてしまった。海外では、日本のイメージはどの程度に変わったかは、1998 年 1998 年 6 月 22 日のDer Spiegelのタイトルでうかがうことができると思う。

日本 — 手本として失敗した！

失業率が高い水準で続けている。

[12]日産自動車株式会社は 1999 年フランスのルノーの傘下に入り、三菱自動車工業は既に 1993 年以降アメリカのクライスラーとの資本提携していたが、2000 年にダイムラー・クライスラーのコントロールに入った。1999 年には、本田技研工業株式会社もドイツの BMW と資本提携関係について話したが、当時に BMW はイギリスのローバー・グループを食うこと、またはロールス・ロイスとの合弁事業に集中したので、この話は進まなかった。

私は 1987 年に日本に来た時に、特に日本の企業のエリート・サラリーマンや通産省の幹部から「ヨーロッパはもうヨーロッパ病で駄目になった」というような横柄な意見を良く聞こえた。1990 年代末に、欧米における日本のイメージは「日本の奇跡」から「日本病」のそれに変わった。1980 年代に拡大した日本研究が多くの国々で、ダウンサイシングされてきた。日本の代わりに、同じ時期に凄い経済成長を経験してきた中国が再び欧米の注目の中心になってきた。

実際には、バブルの崩壊によって、既にバブル時代に加速された日本の社会変動にさらに拍車がかけられてきた。この変化は特に雇用構造の変化と教育制度における変化に目立っている。不良債権で困った金融機関のみならず、バブル時代で、株や不動産の投機に乗った企業の多くは、厳しい収入減を経験せざるを得なかった。それを背景として、1990 年代初頭に「リストラ」は新しいキャッチワードになった[13]。リストラは先ず要らない労働力の解雇を意味したが、これは結局、既にバブル時代で始まった不安定な雇用形態で働く従業員の著しい増加をもたらして、基本的に日本型雇用関係の大変化へ進んで行った。1990 年～2001 年、正社員でない雇用者の割合は 15.6%から 26.7%へ上昇した。特に若者の間に、フリーた、アルバイト、派遣労働、パートタイマーなどの不安定な雇用形態だけで就職ができた者は、2005 年前後に一時的に 40%まで及んできた。特に働く女性の場合に、不安定な雇用形態で働く人は現在多数派を成している。

教育制度の 1990 年代のキャッチワードは「学力低下」でしょう。私は 1991 年頃に始めて、日本人の教授から「新入生の学力が悪くなった」という文句を聞いた。というのは、「学力低下」に関する文句は「ゆとり教育」の導入を先立っている。実際には、「ゆとり教育」の導入は本来に、管理教育の末期に明白になった様々な問題の対策として考えられた。しかし、「ゆとり教育」の導入は、学校における教育の全面的な改革を決して意味しなかった。一方には、ルールが非常に緩和されて、生徒の振る舞に対する放任が著しく増えたが、他方に、授業の実施においては、相変わらず一斉教育の権威主義的な教授法が支配的だ。けれども、このような一貫性をかけている教育方法は、結局、生徒の放棄、特に学力の弱い生徒の放棄に他ならない。しかし、進学率の拡大によって非常に増えた、基礎学力の獲得に不利な家庭環境に置かれた生徒にとっては、特別な指導がない限り「自ら学び、主体的に考える」ことが難しく、授業に対する関心と勉強意欲がさらに減るという現象は、苅谷剛彦らの日本における調査でも、海外で行われた沢山の調査でも確認することができた。結果としては、既に管理教育下に現れた勉強意欲の低下の現象が非常に拡大してきた。苅谷剛彦、耳塚寛明らが論議した「意欲の格差」、「学力の階層化」などの原因は基本的にここから発生してきたと思う。実際には、生徒の家庭環境は、日本社会の経済格差の拡大や価値観の変化によって非常に多様化してきた。通塾と非通塾の効果もあり、学童の様々精神的な勉学障害も増えている現状において、”One size fits all”のような一斉教育は決して適切で

[13] 「リストラ」は本来、ロシア語の”Перестройка”の英語の翻訳の”restructuring”の略語として「社会の再構築」の意味で 1980 年代に人気になったが、その英語の意味は 1980 年代末に「労働市場の再構築」に狭まって来た。1990 年代初頭以降、日本語の意味は更に、不採算事業や部署の縮小やそれに伴う従業員解雇による企業の組織の再構築の意味に狭くなった。

はない。このような制度で、小等・中等教育における公立教育がセイフティネットとしての役割を不十分しか果たしておらず、不平等が拡大せざるを得ないと思う。我々は、現在大学教育においてこの教育制度の全面的な改革で失われた20年の結果に直面しているが、大学は基礎的な学力を身につける場でもなく、そのための補償教育を提供できる場でもないと言わなければならない。

バブルの崩壊と同時に、「国際化」の時代も終わった。日本における経済的な状況が悪化したことを連れて、日本人はむしろ自国に眼を向けるようになった。海外に関する関心も徐々に減った。同時に、外国語教育は非常に英語に集中してきた。このようなことは世論調査でも現れる。「子供の将来にとってどの外国語を習うことが重要だと思いますか」という質問に対して、日本の親の 80%以上は、英語をあげる。他の外国語の内に、中国語だけが親の 40%位に挙げられている。これ以外に、親の 20%以上によって挙げられた外国語がない。英語は現在の世界の中で非常に重要な言語になったが、グローバリゼーション時代の中にも英語だけで国際的なコミュニケーションができるという考え方はエライ間違いだ。

異常の発達は、国際関係学部にも悪い影響を与えた。中部大学のみならず、全国で「国際関係・国際文化」の学部や学科が入学志願者の著しい削減を経験している。勿論、少子化の長期的な影響もあり、不景気と若者の就職難の中で、就職のよりよいチャンスをあげそうな学科に目を向けることも当然だと思うが、国際事情に対する関心が減ったことは、このような志願者減の重要な原因だと思う。全体としては、大学生の間に英語以外の外国語を勉強する動機も凄く削減した。欧米のほかの国々に比べて、日本研究はまだ高い関心を引き続いているドイツでは、現在日本語や日本のことを勉強する学生の数が恐らく日本でドイツ語とドイツのことを勉強する学生の数を上回っているかも知れない。これは決してよい発達ではない。日本の産業大国としての将来は、日本の産業の重要な市場を成している国々の実情や言語に関する知識に依存していると私は思う。日本における状態は隣国の中国と韓国ともかなり違う。両国でも、1990 年代の後半以降日本語、ランス語やドイツ語を中心とした外国語ブームが起こる。欧米や日本に向かっている留学生の数も毎年増えつつあるそうだ。隣国に負けたくない場合には、日本でも海外の研究を再び推進することが必要のではないか？

今からは私がこの 22 年間に日本で取った写真を中心に、私が経験した日本について話を続く。

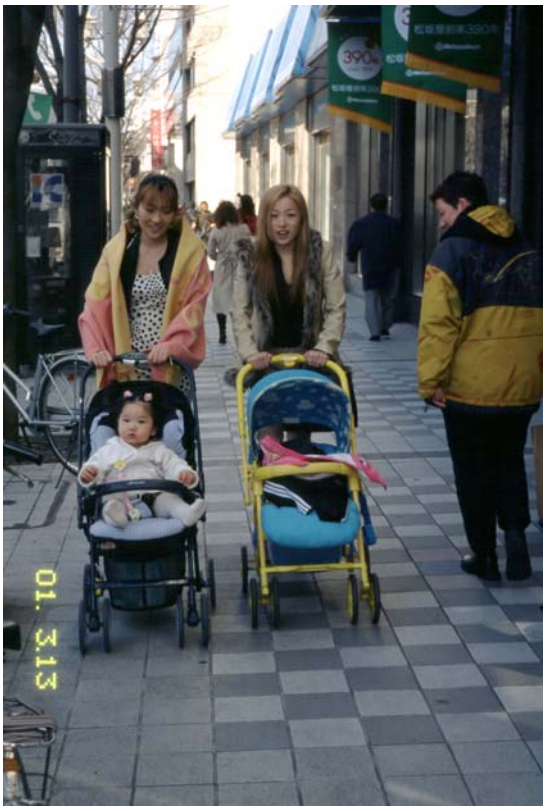
東京都杉並区高円寺・ペンギンハウスのマスター、1988 年と 2000 年

ペンギンハウスも今年設立 25 周年に向かっている。1988 年には、ジャズとブルースのライブハウスだった。定連のうち、中央線に沿って、中野から西荻窪の間に住んだ大学生や大学の若い教員が多かった。しかし、1990 年代に大学生の音楽の好みはジャズとフォークからロックとポプスに変わって、服装のスタイルもカジュアルの方に変わった。ペンギンハウスはその変化に対応せざるを得なかった。現在は、ペンギンハウスはロックとブルースを中心とするノンジャンルのライブハウスになった。ライブのスケジュールも非常に増えた。昔には、週一回・二回のライブがあったことに比べて、現在は殆ど毎日にライブがある。

東京都立川市・朝日タウンズの事務所、1991 年 3 月 3 日　　春日井市・中部大学国際関係学部事務室 2001 年 4 月 23 日

事務室の変化は特に目立っている。私は日本に来た時に、日本の事務室には、PC とワープローが殆ど使われておらず、書類の作成は大体手書きで行われた。机には、書類が山ほどに積んでいた。現在は、積んだ書類の山が消えて、PC が幅広く使われている。

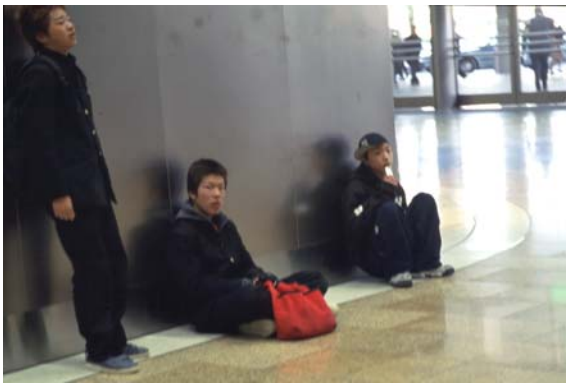
神奈川県鎌倉市・高徳院、1992 年 1 月 26 日



名古屋市中区栄、2001 年 3 月 13 日

1990 年代半ばまで、乳母車は日本で殆ど見られなかった。地方では、赤ん坊が負んぶ紐に入って背負ったことを良く見たが、東京、大阪、神戸、京都などに、当時に西洋で流行った胸に負うことも時々見た。2000 年前後に乳母車が人気になって、赤ん坊の負んぶされたことは、田舎でも殆ど見られないようになった。もちろん、昔に便利な折り畳む乳母車が日本で売れなかった。

神奈川県鎌倉市・鎌倉大仏前、1988 年 4 月 19 日



名古屋市中区名古屋駅、2001 年 3 月 9 日

1988 年、管理教育が未だ強かった。この写真の修学旅行の記念写真のために集まった生徒と先生の熊本県の中学校もそうだった。男の子は皆丸刈り、制帽や制服をきちんと着た。女の子のスカートが長い、先生の姿勢さえも古っぽい。2001 年の名古屋駅に底に座った中学生は全然違う姿勢を見せる。

神奈川県鎌倉市・鶴岡八幡宮、1988 年 4 月 19 日

名古屋市千種区星ヶ丘、2000 年 7 月 31 日

若者の姿勢の変化は、特に女の子の場合に目立っている。200 年の中学生に比べて、1988 年のそれがかなり大人っぽいに見える。

東京・杉並区・高円寺、 1987 年 9 月 13 日

仙台市鶴ヶ谷字佐野原、 1987 年 10 月 2 日

1987 年に日本に来た時に、制服を着た人々の数にビックリした。その大部分はガードマンだったと徐々に分った（最初は

警察官との区別は難しかった）が、以上の写真は祭りのときに交通整理を行った町内会のメンバーです。隣の仙台の郊外に撮った孫を瀬に負ったお祖母さんは当時に地方でよく見られた光景です。

東京駅・八重洲口、 1987 年 10 月 23 日

1980 年代には、東京駅八重洲口前に靴の磨きと修理を行った老人は十数人が並んでいた。渋谷駅にも少し見たが、東京駅には多かった。私はその時に働く老人の数についてもかなり驚いた。靴磨きのみならず、ガードマン、地下鉄の駅で掃除を行った人、京都のお寺で雑草を取る人等々の殆どは、老人だった。勿論、これは既に上に議論した年金制度の問題との関係があったが、東京駅八重洲口の靴磨きについては、1992 年に面白い説明を聞いた。この人々は戦後に東京駅の丸の内側の地区を占拠した靴の販売と修理を行った店を持った靴屋だった。東京オリンピックを契機とした丸の内地区の再開発の枠組みで丸の内から追放されたが、反対運動の発生を避けるために、東京都が彼らに八重洲側で路上に靴の修理と磨きを行う権利を与えたそうだ。しかし、彼らの息子さん達は皆サラリーマンになった。現在は、東京駅周辺の路上靴磨きが消えてしまっている。今年の五月に福岡の天神で路上の靴屋も見た。彼は本格的な靴修理屋台を持った。1987 年に八重洲口前の靴磨きを始めてみたときに、日本は本当に先端に発達した国ですかというような疑問も思い浮かんだ。

愛知県豊明市、 1987 年 9 月 27 日

道に向かっておもて前面が開いているのがとても印象的でした。中に入ってもう一度びっくりしました。狭いところに色々な物が並んでいて、物を見つけ出すのは凄くむずかしく、店の人に探してもらった。店の人には在処がすっかり分かっているようでした。

フトンや洗濯物を窓に干すのもドイツでは見られない光景です。ドイツでは、洗濯物などは道から見えないように、普通家の後ろに干している。

仙台市鶴ヶ谷字佐野原、 1987 年 11 月 21 日

農協の市場でだべている二人のお婆さん — 同じような光景はどの国でも見えると思う。

仙台市・中央市場、1987 年 11 月 21 日

1987 年に、頭にハチマキを巻いた男を店などによく見た。大掃除に手伝うサラリーマンでも。これは日本的で、是非これは撮らなければ、と思った。

東京・港区・白金台、 1988 年 4 月 3 日

「ヤキイモ屋さん」も日本独特のもの。スピーカーの音が印象的でした。初めては意味が分からず、神社の関係かしら、と思った。以上の光景は現在見られないでしょうが、ヤキイモ屋さんは未だ存在する。

東京・浅草観音、 1988 年 4 月 18 日

1987 年と1988 年には、沢山の神社とお寺を訪れた。気付いたことは、神社とお寺を訪問する人のうちには、女性、特に年寄りの女性が多いことだった。実際には、ヨーロッパの教会でもそのグループは圧倒的に多い。

仙台市・鶴ヶ谷字佐野原、1988 年 5 月 4 日

1987 年の秋には、仙台の郊外に始めて稲狩りを見た。1988 年の春には、同じ所で初めて田植えを見た。殆ど機会で行われたが、機械が入れない形の田んぼでは、田植えは未だ手で行われた。現在は、このような田んぼの栽培が止められた。

東京・御徒町、1988 年 7 月 30 日

外人のお客さん（私にとって同国人？）に、「どこか面白いところに案内して」と言われたら、迷わず、アメ横と御徒町に連れて行った。ヨーロッパから東アジアに来る人たちは、一般に非ヨーロッパ的、そしてエキゾチックなものを見たいと思って来るが、現代の日本の日常生活はヨーロッパとあまり違わないことを発見し、皆少し失望感を抱く。良く探せば、まだまだ「昔の東京」が沢山残っているのですが、それは二・三週間だけしか日本にいられない観光者にとっては、とても難しいことです。

東京都・立川市・諏訪神社、1988 年 8 月 27 日

1987 年～1988 年の日本滞在は「祭り」で始まり、「祭り」で終わった。ドイツへの帰国を目前にして、この日私は、友人たちとの送別会のため立川を訪れ、諏訪神社のお祭りを見ることができた。日本滞在中あちこちでお祭りを見たが、この日は、おみこしの奉納、相撲など神社の中での祭事や祭式などを間近かで見ることができ、とても印象的でした。

東京都杉並区高円寺、1989 年 8 月 28 日

東京の有名な夏祭りの一つ、高円寺の阿波踊り。高円寺の商店街の青年部によって、都内在住の徳島出身者の協力で導入したイベントだ。例年 120 万人程度の人手がある。最初の年は、祭りが終わった後に来日したし、翌年は、諏訪神社の祭りと同じ日でしたので見ることができなかった。ドイツに帰って 8 ヶ月後、また日本に戻ることができ、やっとこの年、「阿波踊り」を見ることができた。

東京都杉並区高円寺、1989 年 8 月 28 日

横浜市、1989 年 8 月 13 日

妻は特に中華街のレストランが好き、友たちのうちに、中国人と結婚したドイツ人も居て、横浜は、東京に近く、四人でも、妻と一緒に二人でもよく行った。鎌倉にもよく行った。特に、ドイツからの友たちが私たちを訪問した時、鎌倉は是非と見せた。

神奈川県川崎市・日本民家園、1989 年 10 月 15 日

私たちは東京の杉並区に住んだ。川崎市もこれから近い。日本人の友たちと一緒に日本民家園を訪れた時に、この老人は草鞋作りを見せた。うちの妻が出身したドイツの農村の郷土資料館でも、老人が昔の、物作りなどを説明した。

東京都立川市・朝鮮人部落、1990 年 7 月 1 日

朝鮮人部落の娘たち。私が 1988 年 1 月に立川市中欧公民館で、ドイツとヨーロッパの事情に関する講演をした以降、立川で様々な活動を行った友人仲間のグループに巻き込んできた。そのグループは、在日朝鮮人問題研究会のメンバーの在日朝鮮人も含んだ。1990 年に私たちは、その友たちの家における焼肉パーティーに招待された。戦中に航空機製造の立川飛行機株式会社は、朝鮮人の労働者を使って、彼らが工場構内の宿舎に住んだ。その労働者の戦後に帰国ができなかった者とその子孫の多くはこの宿舎を占拠し続けて、その地区は「朝鮮人部落」を名称するようになった。この部落の住民の大部分は在日本朝鮮人総聯合会のメンバーで、子供は朝鮮学校を就学した。韓服を着て通学した少女は、日本人による嫌がらせといじめをよく経験した。1990 年代末に、立川市における立飛の不動産の大きな再開発が行われたので、この朝鮮人部落は現在も存続するかどうかは分からない。私は 1970 年代で、マルブルグ大学の東アジア・東南アジアの留学生の研究会に参加した時に初めて在日朝鮮人・韓国人問題に触れた。当時のドイツにおける日本研究においては、日本における被差別のマイノリティの問題は殆ど取り上げてこなかった。

山形県、最上川、1990 年 4 月 1 日

昔は、庄内で収穫された米が船で最上川を下って、坂田の港に輸送された。現在は、観光者が船で最上川を下ることができる。船の人は昔の船人の歌を歌って、地酒を飲むこともできる。

東京都羽村市、1990 年 4 月 10 日

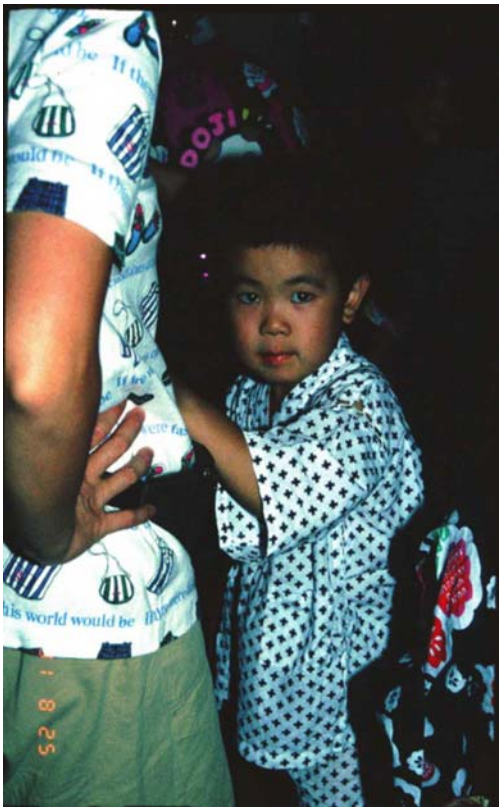
私たちは、花見をしている日本人を具前に出会った時に、彼らが外国人に対して好奇心を抱いて、招待されたことがよくあった。

東京都･立川駅、1990 年 12 月 27 日

年末ともなると、東京では酔っ払いが目立つ。飲み屋などないようなところにも飲み過ぎた人がいた。時々電車の中であまりきれいでないものやうるさいものも見た。これは午後 11 時すぎ、電車を待つ 10 分程の間の出来事です。この人はとても良く寝ていた。それで結局最後は救急車を呼んだようです。ところで最初の 2 枚、ピントがあっていないが、これはカメラのせい。けっして私が酔っ払っていたのではない。念のために。

北海道･知麻･宇登呂、 1990 年 8 月 18 日

日本海と違って北海は夏でもいろいろな魚が捕れるようです。撮影したのは午後 5 時ごろ。午前の漁から帰ってきたところです。カニも、刺し身も、とてもいけました。昔には、この地方で鰊が有名でしたが、取りすぎたので現在は殆ど取れない。



東京都杉並区久我山・高井戸西、1991 年 8 月 18 日・8 月 25 日

盆踊りの子供。東京に住んでいた頃、近所では盛んに盆踊りが開かれていた。大人も子供も一緒に、とても楽しそうで私たちも良く出かけた。 今私が住んでいる地区でも盆踊りはあるが、PTA 主催のせいか、子供ばかりで、東京とはだいぶ印象が違う。

東京都杉並区久我山、1991 年 8 月 18 日

前の晩の盆踊り大会でちょっと呑みすぎたのでしょうか。朝、お店の前で気持ちよさそうに寝ていた。きちんと揃えた靴が、この人の人柄を忍ばせるね。

東京都青梅市御岳山、1991 年 5 月 12 日

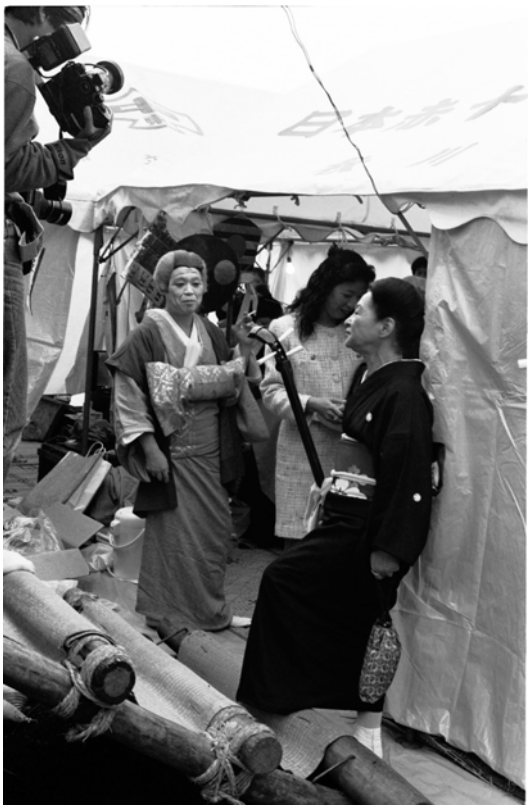
修験道とは、初めて山形県の出羽三山に会った。御岳山にハイキングした時に、東京都にも山伏がいると分かった。

宮城県、作並温泉、1992 年 7 月 24 日

作並温泉で泊まったとき、コケシの職人の工場を見ることができた。

仙台市・中央市場、1992 年 7 月 25 日

この竹職人の写真はもう 17 年前のもの。 今もこういった職人さんは残っているのでしょうか。現在、彼が作ったようなものの殆どが、中国と東南アジアからの輸入品だ。



東京都秋川（現あきる野市）、 1992 年 10 月 25 日

立川の友人に誘われて、二ノ宮歌舞伎のイベントに出かけた。それまでにも何回か歌舞伎の舞台は見ていたが、このときのように自分たちで舞台を組み立て、素人の役者が演じる芝居は初めてでした。演じる人と見る人が一体となり、とても印象的でした。ドイツでも60年代に伝統的なものがなくなった時期があったが、今また見直されている。日本でも改めて伝統的なものに目をむけているんだなと思った。このときは舞台の後ろに行き、役者さんも撮影することができ、とても貴重な体験をした。ただひとつ残念なことは、写真を撮るのに忙しくて、あまり舞台を見られなかったことです。二ノ宮歌舞伎は本来大歌舞伎の季節外に田舎を旅した歌舞伎座だった。1950 年代末以降、テレビが流行って来たことを背景として、二ノ宮歌舞伎がその活動を 1960 年代に辞めたが、持っていた舞台衣服などを 1991 年に秋川市の史料館に上げて市指定文化財になった。同年に隣の都市に明治時代の組立舞台が発見され文化財として指定された。この文化財をどのように使うかに関するアイディアとして一般市民に歌舞伎を教えて、年一回に演劇することができて、1992 年から現在まで続けている。

三重県鳥羽市、1993 年 7 月 19 日

M 大学の聞き取り調査に同行した。 外国人が一緒だと、相手が一生懸命、標準語をしゃべってくれるという理由からでもある。 海中深く潜って「あわび」や「うに」を取る作業は大変ハードなものですが、年配の女性が多いようだった。平均年齢は 60 歳以上。皆自分の娘には後を継がせたくないようでした。これはその形から「馬糞うに」と呼ばれる、小型のうにを加工工場に送るため、解体作業をしているところ。女性たちがとてもよく働くのに感心した。

三重県鳥羽市、1993 年 7 月 20 日

漁村の少年は、夏休み中に非常に元気だった。1980 年代後半以降、この地方における海女の漁村は欧米の文化人類学者の研究対象だったので、彼らは外人に慣れていた。

東京都杉並区高円寺・ペンギンハウス、1993 年 6 月 25 日

私たちはペンギン・ハウスの常連だった。9 月初めに名古屋に引越して、その前にドイツにも行く必要だったので、この一枚は最後の機会に撮ったと思う。

名古屋市昭和区八事本町興正寺、1993 年 12 月 5 日

興正寺には毎月三回の市場がある。何でも売る。特に生魚が安いが、客さんの殆どは年上の人だ。これはここのみならず、他の市場でも同じようだ。ドイツでは、市場は特に若い人の間で人気だ。

愛知県春日井市中部大学、1994 年 3 月 23 日

初めて日本の大学の卒業式に参加した。まず、女子学生のはかま姿が印象的でした。そしてとても形式的なこと。1000 人ほどの学生が一同に会し、壇上には先生たちが並び、一斉に起立、挨拶をするというように。ドイツでは大学に入ってからのコースも一人一人別々で、全員がそろって参加する卒業式といったものはない。

京都市・七条通、1994 年 8 月 9 日

私は市場が大好きです。お店の人と話ができるし、品物もデパートなどと比べて、だいぶ安いような気がする。 でも若い人はあまり好きではないようです。この市場も 60 代以上の女性がお客の大部分を占めていた。

愛知県常滑市、1994 年 5 月 3 日

1994 年に、名古屋とその周辺を少しつつ踏査した。妻は茶道もやって陶芸が好きで、常滑で、この陶芸家のアトリエも訪れた。

名古屋市名東区一社中央公園、1995 年 8 月 20 日

アマチュア野球はとても盛ん。それに女性のソフトボール。特に夏に盛んになるようです。この人はチームの監督さん。プロ野球の監督のように振舞っていたのがちょっとおかしかったです。ドイツはサッカーの国。米軍が戦後に米軍の占領地区で若者の野球を推薦したが、占領が終わった後、その殆どの野球クラブが消えてしまった。日本に来た前に、野球に関して何も分からなかったが、スポーツを見ることがあまり好きではないので、現在も野球をあまり分からない。

名古屋市千種区平和公園、1995 年 5 月 6 日

平和公園は内の家に近い公園の一つだ。よく散歩に行く。この公園の土地の一部は戦後に住民によって菜園のために占拠されて、1990 年代末までその菜園の幾つかは未だ存在したが、市は残った占拠者を追放して、現在は全域は公園になった。

愛知県豊田市足助町香嵐渓、1995 年 7 月 9 日

夏に友達とその家族と一緒に香嵐渓でバーベキュー・パーティーをやった時の一枚。春と秋にも香嵐渓の周辺によくハイキングした。

名古屋市名東区高間町、1996 年 9 月 7 日

友達とふざけながら楽しそうに学校から帰る子供たち。私の家の近所でよく見かける光景です。子供たちもある年齢まではかなり元気に見える。東京から引っ越した後にびっくりしたことの一つは、私たちが住んでいる地区に、午後に母親の監視なしに外で遊ぶ子供が多いことだ。東京の杉並区の住宅地では、一緒に外で遊ぶ子供の仲間グループを決して見えなかった。

名古屋市昭和区・大須大道町人祭り、1996 年 10 月 13 日

大須は大須観音を中心にした地区で、どこか雰囲気が浅草に似ていて、とても気に入っている。最近は若者にも人気があり、アメ横と呼ばれる場所もある。このお祭りは、10 月初めに開かれ、全国から大勢の大道芸人が集まる。初めてこの祭りに出かけてみた。 この人は子供たちにも大人気でした。

名古屋市昭和区・大須大道町人祭り、1996 年 10 月 13 日

大須地区には、商店街にその基盤を持つ伝統的なコミュニティが未だ存在する。最近、大須における店の多くは若者向けの商品に変わったが、その新しい店の殆どのオーナは、昔の店のオーナの子孫だから、コミュニティは相変わらず存続する。

名古屋市昭和区・大須大道町人祭り、1997 年 10 月 12 日

二回目にこの祭りに行った一枚。この人、口上がとても上手でした。そして、手早い動作で唐辛子を詰める手際のよさ！彼もかなり有名な人だそう。

名古屋市昭和区・大須大道町人祭り、1997 年 10 月 12 日

みごとなナイフさばきに、子供たちもびっくり。 祭りのお客に子供が多かったのも目立だった。どこの国の子供も好奇心がいっぱい、やはり楽しいことには目を輝かせる。

名古屋市・東山線、1997 年 11 月 4 日

地下鉄の中で夫々がプライバシーの領域を持っていることに興味を持った。ファインダーをのぞかずにシャッターを押したが、このカメラ目盛りがメートルでなくフィートだったので、距離合せにとてもてこずった。 そして、中年男性の疲れた表情にはとても共感を覚えた。1997 年にドイツのカセル市の DOCUMENTA X で Walker Evans の 1940 年の”Subway Portraits” を見たことが私の地下鉄の写真に大きな刺激になった。1997 年～2002 に「地下鉄人間」というプロジェクトを実施した。

愛知県春日井市、1998 年 7 月 18 日

前期の終りの暑気払。私が受け持った5回目のゼミです。専攻は家族社会学。テーマが自分に身近なものであるとき、今の学生たちもかなり意欲的に取り組む。この生徒たちも今は社会人。先日、空港で働く一人にばったり再会、翌日早速研究室を訪ねてきた。そんな楽しみ焜[ミにはある。

名古屋市・名城線、1998 年 1 月 26 日

これも「地下鉄人間」の一枚だ。プロジェクトは 2002 年の秋に終了したが、現在も時々地下鉄で写真を撮る。

名古屋市昭和区鶴舞公園、1998 年 3 月 28 日

名古屋の中心部にある一番大きな公園。あちこちの公園にこうした囲碁や将棋のできるコーナーがあり、毎日通ってくる人もいるようです。東京ではあまりこうした光景は見られなかった。ほとんど男性ばかりというのも印象的でした。マージャンをするグループもいましたが、この人たちからは、カメラを向けるとひどく怒られた。きっと何か訳があるのでしょう。ドイツの公園でもチェスなどをする場所がある。

名古屋市中央線、1999 年 7 月 9 日

午後に大学から帰った時、この二人の女子大学生を撮った。中部大学ではなく、春日井駅の近辺にスクールバス停を持つ名古屋造形大学の学生でした。

名古屋市千種区覚王山夏祭り、1999 年 7 月 24 日

この祭りには、地元の人たちがフリーマーケットのお店を出す。この日は夏休みで父子連れの姿も目立つ。

名古屋市中区栄、1999 年 12 月 11 日

若者もたくさん集まる名古屋の中心地。 ミニスカートに厚底ブーツ、そして白いコート、服装がとても印象的でした。

長野県・妻籠宿、1999 年 9 月 12 日

日本に来た時に非常にビックリしたことは、伝統的な建物が殆ど残っていないことだ。私が生まれたドイツのヘッセン州の北部には、中世の町並みが残っている小さな田舎町は沢山ある。1950 年代と 1960 年代には、このような町でも「近代化」と「再開発」が起こって、昔の建物の一部が壊されたが、新しいビルは周りの居建物にあわせる外見を持つことが再開発の許可に義務付いた。1970 年代には、再開発の政策は基本的に「保存しながら、近代化する」ことに変わって、これは現在この

地方における観光物産の重要な資源になってきた。

長崎市中華街、2000 年 3 月 25 日

以前に比べて日本の国内を旅行する機会が少なくなったが、久しぶりに長崎に行った。この中華街は長い歴史を持ち、原爆の被害からもまぬかれた。私たちが訪れたのは、ちょうど昼時。何か大きな声で指図していた。もしかして、この地区の長老でしょうか？

名古屋市中区栄、2000 年 6 月 7 日

昔は見られなかったブロンドの日本人。時々外人？　と勘違いするほど。この 22 年の間に、服装も多様化し、かなりオシャレな若者が増えた。日本に来たての頃(89年)、ドイツから来た私の教え子が、成田で、「みんな黒い髪！」と言って驚いていたのが嘘のようです。

名古屋市中区大須商店街、2000 年 8 月 12 日

コンピューター関係の買い物で大須地区にはよく出かける。もちろん、フラット遊びにも。この日は夏休みで、商店街では様々なイベントがあり、子供連れの人を沢山見かけた。中でも、この父と娘の光景がとても印象的でした。若い世代では、子供の面倒を見る父親が増えているようだ。学生たちのあいだでも、「父親不在の家庭」というものは、なおさなければという意識が強く、家族の見方も変わってきているようだ。

名古屋市名東区名東本通、2001 年 9 月 14 日

手打ちそば・うどん・きし麺の店では、毎日麺類を作る。ショ

名古屋市瑞穂区山崎川、2001 年 4 月 1 日

名古屋市名東区名東本通、2001 年 5 月 28 日

若い夫婦が赤ちゃんを連れて出掛ける。10 年前にこのよう

ーウィンドーで道から仕事をやっている職人を見える。

な光景を殆ど見られなかった。道路の工事で、働く人が二人、ガードマンを含んで 7 人が現場に出掛けたが、カメラマンのために「働く」ポーズをした。

三重県伊勢市、2001 年 3 月 17 日

祭りの時に、幼稚園の子供もイベントに入れた。伊勢市には、祭りを運営するコミュニティが未だ強い。次世代を育てるために、子供も若い頃から参加させることが必要。ドイツにおける伝統的な祭りを運営する団体の場合にも同じようだ。

名古屋市名東区一社、2001 年 7 月 13 日

2000 年前後、都市の何処でも地べたに座る若者が非常に増えた。当時に、若者の犯罪もメディアの大きな話題になったので、この若者が怖いと感じる老人が多かった。1960 年代のドイツで若者が公園や広場に集まって、一般住民の違和感を起こしたことを思い浮かんだ。

名古屋市千種区今池 MISFITS、2002 年 11 月 29 日

名古屋市中区名城公園 Nagoya Walkathlone、2002 年 5 月 26 日

名古屋における外国人のディアスポラ・コミュニティが主に、外国人向けの飲み屋などと様々なイベントを通じてできている。Misfits は外国人のバー。Walkathlone は名古屋国際学校(Nagoya International School)とアメリカ商業会議室の共同開催の大きなチャリティ・イベントだ。外国人のディアスポラ・コミュニティに巻き込んだ日本も少なくない。

名古屋市東山線、2002 年 10 月 13 日

「地下鉄人間」の一枚。この中学生二人の姿勢は、古い写真の印象を思い浮かぶ人が多い。「本当に 2002 年の写真ですか？」と展覧会によく聞かれている。

名古屋市名東区東山線一社駅、2002 年 10 月 15 日

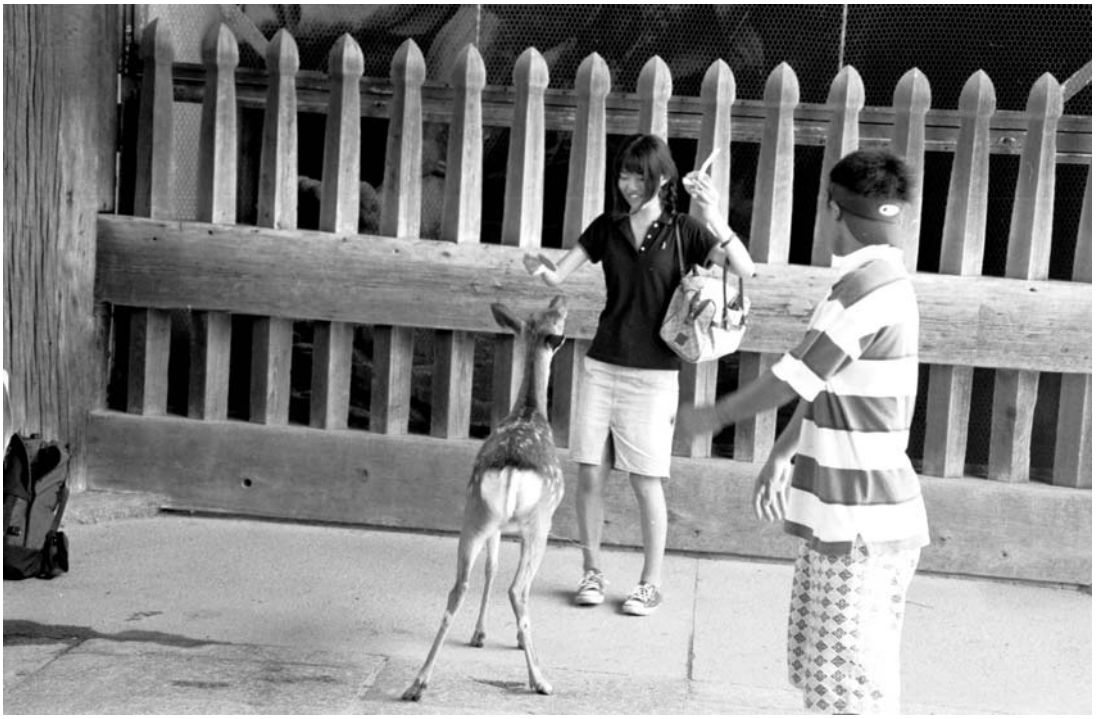
これも「地下鉄人間」の一枚。夜に仕事から帰っている男。疲れた顔をしている。

名古屋市千種区池下、2003 年 5 月 17 日

池下駅前の光景。日本の大都会の典型的なストリート・シーンだ。15 年前に比べて、服装のスタイルだけが変わった。このような光景の写真を沢山撮った。この写真に面白いのは、真ん中の老人の姿だ。

名古屋千種区今池 MISFITS、2003 年 6 月 15 日

外国人向けのバーにおけるライブ。外国人と日本人から構成したバンドも名古屋に幾つかがある。



奈良市東大寺、2003 年 9 月 9 日

中部大学の留学生の研修旅行に参加して、久しぶりに奈良と京都に行った。奈良の鹿が有名です。宮島にも鹿がいっぱいいる。餌を上げないとかなり攻撃になる。プラスチック・バグも食べる。宮島で、女の人のレーヨンから作ったブラウスを食おうとしたことも見た。客様が多い日曜日や祝日には、奈良の鹿は昼くらいで腹がいっぱい、何も食べれないようになっている。

名古屋市昭和区大須、2004 年 8 月 22 日

この孫と一緒に自転車に乗っているお祖母さんはベルギー人。子供として両親と一緒にブラジルへ移住して、向こうで日系ブラジル人と結婚した。息子は 1990 年代に日系ブラジル人として名古屋に来た。主人が亡くなった後、彼女は息子の家族と一緒に暮らすようになった。偶然に撮った写真ですが、彼女は絵画家で、2004 年 11 月に名古屋国際センターの外国人芸術品展で展示した。私は同じ展示会でこの写真を展示した。セットアップの日に、彼女の息子はその写真を見て、私たちは知り合いになった。不景気のゆえに、その家族は去年にブラジルに帰った。

名古屋市名東区藤ヶ丘、2004 年 9 月 12 日

和風レストランのランチ・メニューのチラシを渡している若い女性。この写真の場合にも「本当に 2004 年の撮影ですか？」というようなコメントがよくある。

三重県松坂駅、2004 年 9 月 23 日

国際関係学部の職員旅行で松坂に泊まった。朝食の前に写真を撮るために出掛けた。松坂駅東口に撮った一枚。

愛知県長久手町・愛知万博会場、2005 年 5 月 5 日

2005 年の 3 月に、最後の妻と一緒のヨーロッパ旅行をした。日本に戻った直後、彼女の病状が急激に悪化して、4 月に亡くなった。夏は 6 週間ドイツへ行く必要だった。その年に日本で写真を撮る機会が殆どなかった。愛知万博の会場で撮ったフィルム 2 巻位だけ。以上の写真はドイツで撮った写真と一緒に「父と子供」のシリーズとして同年の名古屋国際センターの外国人芸術品展に展示された。

愛知県長久手町・愛知万博会場、2005 年 5 月 5 日

日本人の若い女性が、外国の民族服を扮した記念写真も、民族服を着ている外国人と一緒の記念写真も大好き。愛知万博では、そのための機会が多かった。

愛知県長久手町・愛知万博会場、2005 年 5 月 5 日

ドイツから来る人々にとって、このような飲み水の機械は、日本の特有なものとして考えられているが、アメリカでも同じような機械を見た。

東京都立川市柏町、2006 年 7 月 15 日

立川市の友達が持っているギャラリーで写真展を開催した。朝に玉川上水に散歩したときに彼を出会った。写真は趣味だって、私のライカを見て、話しを掛けた。

名古屋市中区栄、2006 年 8 月 15 日

名古屋のストリート・シーン。恋人である印象をする。

名古屋市中区栄、2006 年 8 月 15 日

これは、車の窓から撮った一枚だ。

名古屋中区栄、2007 年 2 月 24 日

講演で、ライブの演奏をやっているバンド。そのような光景は初め 1997 年に東京の原宿、代々木公園の側に見た。当時には、井の頭通りが土日に、神宮橋と代々木公園交番前の間に交通が遮断されて、若者が路上に演奏したり、踊ったりした。これは海外でも有名だった。1986 年の秋に、これに関して Der Spiegel にも記事があった。代々木公園前の若者の演奏と踊りが 1990 年代初頭に、代々木公園が中東からの不合法滞在者の集まる場所になった頃に禁止されてきた。名古屋の久屋大通公園では、演奏などの場所が交通と関係がないので、面白い場所だ。

名古屋市名東区高間町、2007 年 7 月 31 日

夏休み中、公園でバスケボールをやっている高校生。楽しかったそうです。

名古屋市中区栄、2007 年 10 月 13 日

栄地下のクリスタル広場で撮ったガードマン。警察官との区別は外国人にとって時々本当に難しい。

愛知県春日井市松本町中部大学、2008 年 3 月 22 日

2008 年には、中部大学で沢山の写真を撮った。これは卒業式の日、国際関係学部の卒業証明書の配分のときだ。彼女は自分の変な顔の写真を撮っている。まだ大人になりたくないらしい。

愛知県春日井市松本町中部大学、2008 年 7 月 10 日

春日が丘高校の高校生が中部大学のキャンパスを通して帰宅する。学校が終わったから、楽しい顔をしている。

愛知県春日井市松本町中部大学、2008 年 11 月 2 日

中部大学祭を訪れている少女。焼き鳥が美味しかったそうです。

福岡市中洲、2009 年 5 月 16 日

福岡市美術館に開催された展覧会のために福岡へ行った。夜だけに少し写真を撮るための暇があった。彼女達は「ベンテンズ」と言う。毎夜に中州と天神を結ぶ福博であい橋で演奏している。上手くて、かなり人気だ。

大阪市天王寺区生國魂神社、2009 年 7 月 11 日

大阪市天王寺区のギャラリーでの展覧会を準備した日に、生國魂神社の祭りを撮る機会があった。天王寺区には神社と寺が多く、夏には沢山の祭りがある地区だ。伝統的なコミュニティがまだ活発的に存在する。

参考文献

Abegglen, James C. (1958): *The Japanese Factory: Aspects of Its Social Organization.* Glencoe, Ill.: The Free Press. ［日本語翻訳 (1958): 『日本の経営』、ダイヤモンド社］。

Dettloff, Ariane and Hans Kirchmann (1981): *Arbeitsstaat Japan: Exportdrohung gegen die Gewerkschaften*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt.

Deutschmann, Christoph (1987): *Arbeitszeit in Japan: organisatorische und organisationskulturelle Aspekte der "Rundumnutzung" der Arbeitskraft.* Frankfurt: Campus.

土井健郎（著）(1971):『甘えの構造』、弘文堂。[英語翻訳 (1973): *The Anatomy of Dependence*. Tokyo; New York: Kodansha International.

Johnson, Chalmers (1982): *MITI and the Japanese Miracle: The Growth of Industrial Policy 1925-1975.* Stanford, Cal.: Stanford University Press. [日本語翻訳 (1982):『通産省と日本の奇跡』、ティビーエス・ブリタニカ]。

Kahn, Herman (1970): *The Emerging Japanese Superstate: Challenge and Response*, Prentice-Hall.

Kahn, Herman and Thomas Pepper (1997): *The Japanese Challenge: The Success and Failure of Economic Success*. New York: Crowell.

苅谷剛彦（著） (2001):『階層化日本と教育危機：不平等再生産から意欲格差社会』、有信堂高文社。

宮本政於（著） (1993)：『お役所の掟：ぶっとび「霞が関」事情』、講談社。［英語翻訳 (1994): Straitjacket Society: An Insider's Irreverent View of Bureaucratic Japan. Tokyo; New York: Kodansha International. フランス語とドイツ語の翻訳は 1996 年に出版された］。

中根知恵（著）(1967):『タテ社会の人間関係』、講談社。[英語の翻訳 (1970): *Japanese Society*. Berkley: University of California Press].

Park, Sung-Jo (ed.) (1985): *The 21st Century, the Asian century?* Berlin: EXpress Edition.

Ponting, Herbert G. (1911): *In Lotus Land Japan.* London: Macmillan.

Sabouret, Jean-François (1985): *L'empire du concours: Lycéens et enseignants au Japon*. Paris : Autrement.

Schoolland, Ken (1990): *Shogun's Ghost: The Dark Side of Japanese Education*. New York: Bergin & Garvey

生命保険文化センター（編） (1987):『第 2 回日本人の生活価値観調査』、生命保険文化センター。

生命保険文化センター（編） (1992):『日本人の生活価値観調査 — 1991』、生命保険文化センター。

生命保険文化センター、野村総合研究所（編） (1980):『日本人の生活価値観 ： 将来社会展望のために』、東洋経済新報社。

総務庁長官官房老人対策室 (編) (1987, 1992):『老人の生活と意識 ： 国際比較調査結果報告書』、（第 2 回と第 3 回の調査報告書）、中央法規出版。

Vogel, Ezra F. (1979): *Japan as Number One: Lessons for America*. Cambridge, Mass., London, England : Harvard University Press, 1979

White, Merry (1988): *The Japanese Educational Challenge: A Commitment to Children*. Tokyo: Kodansha International.

『中部大学国際関係学部設立 25 周年記念

この 25 年間日本社会を取り巻く内外の変化

講演全記録と日本滞在 22 周年写真集』

著者: **Ulrich Moehwald**

5 ページの写真 Herbert Ponting, Open Domain

5 ページ以外の写真 © Ulrich Moehwald

Der Spiegel* 表紙 © *Der Spiegel

グラフ作製 Ulrich Moehwald

発行所:

Ulrich Moehwald

名古屋市名東区高間町 310

2009 年 11 月

再発行:

一般社団法人マラフィキ・プロジェクツ

〒465-0081 名古屋市名東区高針台 **1-904-C**

℡ 090 2680 9798

e-mail info@marafiki.org

2016 年 **10** 月